

④New Tourism～着地型観光のあり方～

レジュメもきれいなレイアウトで作成されていましたし、発表用のパワーポイントもセンスの高さを感じさせるものになっていたと思います。しかし、まとめ・結論に当たる部分があり明確に出せていない印象を受けました。

「着地型観光」という新しい概念に着目し、「発地型観光」という対概念との比較で検討している点や、「現在の取り組み」について「ハード面」と「ソフト面」と側面に分けて分析している点には好感を持ってました。ただ、全体的にもう一步踏み込んでもらえると良かったのではないかと感じます。

このグループの発表に対しては、フロアからの質問が他のグループと比べてやや多めに出ていました。多くの方に関心を持たれる面白いテーマを設定されたということを示しているかと思います。今後さらに研究を深めていただければと思います。

⑤外資系ホテルの東京進出

この分科会の中で唯一の2年生グループでしたが、とてもよく頑張っていたと思います。レジュメを読ませてもらった段階では、外資系高級ホテルが「外国人ビジネスマンの増加による需要を見込んで東京に進出してきたのではないだろうか？」という仮説を挙げて終わってしまっていましたので、研究がまとまりきっていないのかなという印象を受けました。ただ、当日の発表においては、レジュメにも「検証対象」として列挙してあった様々な角度からの分析を重ね、何とか納得できるところまでは持って行けていたと思います（質疑応答の中で多少その結論からずれるのではないかと感じる回答もありましたが）。

発表の仕方についても、1人だけが話をするスタイルには賛否両論あるかもしれませんが、質問への対応も含めて非常に堂々と対応していたと感じます。パワーポイントについても、発表に合わせてよく作り込まれていたと思います。

第2分科会

前ホテルオークラ福岡 社長 金子 順一

1. 分科会全体に対する評価

昨年の第4回に引き続き、今回も、グループ研究発表会の審査委員を拝命する光栄に浴し、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

全般的に見て、まず気づいたことは、昨年と比べて、発表の際の原稿の棒読みがほとんどなくなり、発表技術に進歩が見られたことである。

しかし、昨年同様、大きな社会問題をテーマに取り上げたグループがあったが、そのチャレンジ精神は大いに評価するが、その問題の大きさ、深さゆえに、問題を完全に理解し、筋道を立てて結論に至るのが難しいためか、短絡的な結論や浅い上滑りしたようなまとめになり、昨年のグループと同じように説得力が欠けるものとなっていた。

ぜひとも、過去の事例を学んで欲しいと思う。

最後に、私の担当した分科会で発表した学生さんから、私の講評に対し御礼と反省の手紙を頂戴したことを、ご披露しておきたいと思う。これは、学生の皆さんが、研究テーマに対し、一丸となって真摯に勉強し、皆の前で緊張しながらも、発表し終えたという達成感の証しであり、また、今後、彼らは自信をもって勉学に励み、巣立っていくことを確信するものである。

2. 各グループに対する講評

①女性シニアシューズ開発

産学連携が叫ばれている昨今、靴のメーカー「ムーンスター(旧月星化成工業)」と連携し、さらに、大学のデザイン科も取り込んで、女性のシニアシューズを新しく開発しようという試みは、時代の要請にも沿うものであり、大変良いと思う。

研究テーマの背景として、高齢化が進む日本の現状を認識した上で、「履き心地」という機能性だけでなく、デザイン性も追及したシューズを、女性シニアが望んでいるというニッチな市場に目をつけた着眼点は素晴らしい。

また、女性シニア100名を対象にアンケートを取ったり、専門のシューフィッターの方に靴作りを学んだり、努力を惜しまぬ姿勢は好感が持てる。

発表もスマートで良かったが、ただ惜しかったのは、このシューズのコンセプトを「ノスタルジア(なつかしさ、郷愁性)」としたことである。「続 ALWAYS三丁目の夕日」の映画のヒットに、多分に影響されたものと思われるが、このようなシューズを購入しようとしている女性シニアは、当たり前だが、内に閉じこもらず、スポーツ、ウォーキング、旅行などをしたり、ボランティア活動に参加したり、知的教養を高めるために積極的に活動している外向的な人たちである。このような元気な女性シニアは、年をとっても常に若々しく、前を向いて人生を歩いている方々といって差し支えないと考える。

②若者はなぜ3年で辞めるのか?

このテーマは非常にインパクトのある興味をそそるテーマである。就職を控えている学

生たちにとって、早期離職という身近であり、しかも大きな社会問題を取り上げた意欲は評価できる。

厚生労働省の調査によれば、大学を卒業して就職しても、3年以内に辞めてしまう若者が3人に1人の割合にいるという。この実態を、インセンティブが早期離職の原因の一つではないかと考え、ホテル業と建設業に絞り、「有給休暇の多さ」と「初任給の高さ」という二つのインセンティブの面から調査したが、明確な結論が得られなかったようである。発表の技術も今一つで、その上、結論が曖昧なために、テーマが皆の関心を集めたのに比べて、説得力を欠いたものになってしまった。

今後もインセンティブの面から、離職との関連性を追及していきたいという考えのようであるが、インセンティブ面からだけの追求で本当によいのであろうか。確かに、いまどきの若者の仕事に対する関心事は、まず賃金や労働時間などの条件の良し悪しであることは承知をしている。しかし、仕事とは、なるべく楽をして、お金を稼ぎ、生活の糧とするためだけであらうか。私の個人的希望としては、「なぜ我々は働くのか」という仕事の本質や思想にまで掘り下げて議論してから、この問題に取り組んで欲しいと思うし、また、就職して3年を経過しても現在働いている先輩および現実に、3年以内に離職してしまった先輩たちを訪ねて、直接、生のお話を伺う努力も必要と考える。

③顧客満足度を高める3つの方法

このグループの発表の一番良かった点は、文献の研究からはじまり、結論に至るまでの導き方が、理路整然としており、テーマもシンプルで誰にも理解しやすかったことである。文献の研究から得られた知見、すなわちマーケティング手法を、香椎祭における出店に当てはめ、お客様と自分たちの双方にとって「Win-Win」の関係を築くことが可能であることを実証したことは、真に素晴らしいことである。

顧客のニーズを捉えるために、まず仮説を設定しているが、これは非常に重要な要件である。そして、この仮説に基づいて学内で70人のアンケート調査を行い、その結果から、ベンチマーク手法を用いた実態調査を行った上で、三つの商品（タピオカドリンク、ランクフルト、フライドポテト）に絞り、販売価格の設定を行うなど、セブン&アイ・ホールディングスの鈴木敏文会長が提唱している、お客様本位の商売原則にも叶ったものである。

ただ、香椎祭開催中、店が繁盛しすぎて忙しく、商品毎の売り上げ記録を取ることが出来ず、売り上げ分析をすることが不可能であったのが残念であるが、これを契機に自信を

持って更なる勉学に励んでいただきたい。

④戦後福岡県の経済発展

まず、戦前における日本の工業生産額と福岡県の工業生産額とを比較し、福岡県では、軽工業よりも重工業が発展していた。

そして、戦後は、日本全体としてみると、政府が重工業の振興に力を注いだため、軽工業から重工業へと産業構造が変わっていったが、福岡県の場合は、同様に重工業も発展していったが、軽工業も発展していったので、重工業と軽工業の比率は殆んど変わっていないというのが、どうも結論らしいが、聴講者に訴えるものは何もなかったと言って差し支えないと思う。

ただ、過去の統計資料からの数字を調べて、それを発表しただけとしか思えなかった。福岡県の戦後の経済は、日本全体と比べて、重工業と軽工業がバランスよく発展してきたので、「なにになにである」というのが結論ではないだろうか？

また、発表の技術および態度も一考を要すると思う。

⑤商学部はいかがですか

大学の正規のホームページだけではカバーしきれない隙間の情報を受験生たちに提供しようとして、11人の学生が集まってブログを開設したことは、大変素晴らしいことである。自分たちの生の声を受験生に伝えて、九産大の良さをアピールしようという発想は11人の皆さんが、現在のキャンパス生活に魅力を感じているからこそ、浮かんできたものと推測される。

このブログの開設にあたり、組織的に企画班とデザイン班とに分け、4月のWeb 2.0（双方向）の勉強からはじまり、サーバーの構築、12月のサイトの公開に至るまで、なるべくお金をかけずに立ち上げた苦勞の説明は、とても分かりやすかった。

コンピューターに興味のある人たちであるから、パワーポイントの出来栄も最高であったが、惜しむらくは、最初の発表者の声が小さく、発表の内容が悪いわけではないが、何となく頼りない印象を与えてしまった。

ブログを拝見させていただいたが、今後、このブログを通して情報を発信していくにあたり、更なる内容の充実を図っていくとともに、可能なら、皆さんの卒業で終わりではなく、後継者を見つけて継続されてはいかがであろうか。

福岡女学院大学人文学部現代文化学科 准教授 浮田 英彦

1. 分科会全体に対する講評

全体的な感想を点数にすれば4点としました。発表態度、パワーポイントの技術力、レジュメの構成、テーマ設定および報告の内容、いずれの点においても皆さんの懸命な努力が見てとれました。ただ、5点に1点不足しているのは、審査内容にはないのですが独創性という点です。独創性とは「そう来るか」といわずような学生ならでわの固有性と考えます。社会に長く浸ると事前に答えを出してしまうことが多く「こんなことたぶん無理だ」というような制約をしてしまいます。この点、学生の皆さんは思考の壁を作ることなく自由に発想することができる、これこそ皆さんの強みです。全体的にこの点遠慮があったように思います。要するに未来への期待の1点とと思って下さい。今後の更なる精度の高い研究に挑んで下さい。

2. 各グループに対する講評

①女性シニアシューズ開発—拡大する市場—

大胆な研究に興味を引かれました。また、産学連携事業として商品化したものを実際に販売する計画であること。この点は産学連携という観点から大きな意義を感じました。発表に関しても自信を持って述べていた点が評価できます。ただ、コンセプトとしているノスタルジアと商品特性に関する点に、いま一つ説得力が弱かったように感じました。しかし、皆さんの熱意が感じられた研究発表でした。

②若者はなぜ3年で辞めるのか？

難解な問題に挑んだことは評価できます。しかし、論点がいま一つ明確に掴めていなかった点と、結論付けにも研究不足が感じられました。この問題は、とても重要であることは間違いありません。特に、皆さんの研究対象としたホテル業は、機械化できない点が多く、必然的に人に依存しなければなりません。若年人口が減少する現在、若者が辞めてしまうということは実に大きな問題です。そこで、もっと身近な観点から考察してはいかががでしょう。例えば、皆さんの中で、ホテルなどでアルバイトをしている人は多いはず、その中から率直な情報を収集して、学生らしい大胆な視点から研究を行なってはいかががでしょう。是非、業界にインパクトを与えて下さい。

③顧客満足度を高める3つの方法

一言でいえば基礎がしっかりしている研究発表でした。どの部分の基礎がしっかりしているのかというと、研究の手法という部分です。この部分は実際の成果に見えてこない部分で、とかくおざなりになりかねません。研究計画の基礎がしっかりしていないと、見栄えはいいが中身がない、というようなことになってしまいます。しかし、皆さんの発表にはどの様な船で、どのような航路で、そしてどこへ着くかといったことが実に明確です。そして、よく航路を理解しているため、必然的に舵を握る手にも自信が漲るというプレゼンでした。また、指導教員の研究法に対する指導が実に行き届いていると思われ、同じ教員として感服する研究発表でした。卒業論文も大いに期待できると思います。

④戦後福岡県の経済発展—戦後から高度経済成長までの工業発展について—

地元福岡の経済発展を題材にすることは大いに意義深いことです。データもよく精査され発展経緯に関してはよく分かりました。ただ、ここまで調査したのであれば、結論付けに、もう一步踏み込んで欲しかったと思います。例えば、明らかになったことを踏まえて、今後福岡の問題点と課題に対して、皆さんの考えを聞いてみたかったと思いました。また、プレゼンテーションがパワーポイントに頼りすぎているようにも感じました。画像やデータはあくまでも補足です。自分の声で自信を持って発表することを勧めます。是非、大胆さに挑んで下さい。

⑤商学部はいかがですか—挑戦！僕らがてがける新しい情報サイト—

目的が明確で、特に制作過程における管理組織などに関する点は精度が高く、大いに評価できます。是非、引き続き研究を重ね、完成度の高いものが出来ることを期待します。ただ、レジュメに関してですが、要約という観点から見ると少し一考したほうが良いと思います。例えば、この研究のポイントは制作面も重要ですが、運営と管理をいかにして組織的に行なっていくかという点にあると思います。レジュメにフローチャートで補足するなどはいかがでしょう。今後の運営に期待します。

3. おわりに

今回の発表会をチャンスという側面から少し述べてみます。CHANCEとは辞書を引くと好機や絶好の時などと説明しています。今回の発表会は学生の皆さんには絶好の好機であったと思います。なぜならば、私のような若輩者は別として、審査員は各界を代表する

方や、一流の研究者です。このような方々から直接アドバイスを受け、コミュニケーションできるということは決して多くはないはずですが、このように考えると、質問等が全体的に少なかったことは少し寂しい感じがします。外れた質問大いに結構です。誰も覗こうとしない裏側こそ、そこにワクワクする何かが潜んでいるかも知れません。型どおりのアプローチを大いに外れ、独創性ある研究に挑んで下さい。

また、発表会の準備には多大なる労力がかかったことを察します。関係した先生方、職員の皆様に慰労と感謝を申し上げます。すばらしい発表会ありがとうございました。

第3分科会

元ダイハツ工業株式会社 副社長 深森 芳昭

1. 分科会全体に対する講評

昨年に引き続き2回目の外部審査員として参加させていただき、気付き点をのべてみたい。まず昨年とくらべて進歩している点ですが、なんとといっても課題テーマについて、実際の「現地」に出かけて行って、「現物」をみようとする努力が多くのグループに見られることです。

昨年の講評でも記しましたようにテーマの実態は、書類で読んだことや頭のなかで考えていることと必ずしも一致しているとはかぎりません。

自ら汗を出して「現地」に赴きテーマの課題に挑戦しないと、自信のある提言などできません。私が育った自動車産業界ではこの「現地、現物、(現実)」を徹底的に叩き込まれます。日本の自動車産業界が今日の状態にある原点といっても過言ではありません。現在はコンピューターの進歩でバーチャルの考えが強いですが、いつまでも「現地、現物」の考えを忘れないでいてほしいと思います。

もう一つ進歩は発表の内容に厚みが見られることです。僅かの論及ですぐ結論、提言をだすことが少なくなりました。グループの各メンバーに課題を割り振って、夫々が研究を進めていけば十分なデータが揃うはずですが。

そうして、全員で討議し結論を導き出していく過程が大事なのです。

次に気になる点ですが、このテーマで「なにを狙い」、「なにが解決できればよしとするのか」をはっきりと、一番はじめに認識することが不足しているように思われる点です。出来れば資料にそのことを織り込んでほしいと思います。

最後に運営面で、フロアー出席者数についてですが、折角の発表が一般受けしないテーマのため極端に少ないケースがあった点です。